

火星



七曜抄

山尾玉藻

磴の上
に空と声ある
初不動

縛りある
冬川の辺の
屋台かな

鼎談のひとり
ひとりに雪
明り

白息の
出会ひた
くなき人
なりし

いろいろなシヨールが来たる松林

にぎやかに霰のありし巢箱かな

夜焚火に染まる赤子を渡されし

水音の巡れる雪の日暮かな

旧正の水を走りし鳩

柿の木のかたち
に春の雪となる

玉藻俳句鑑賞

土筆野に遊びし足を拭きやりぬ 玉藻

〔火星〕平成十五年四月号より

土から直接生え筆の形をしているので土筆と書くつくし。春うららかな日、土手や空地にいっぱいあつた風景は懐かしいものとなつてしまつた。

差知子先生ご逝去前後の玉藻主宰の句は凜として哀しい。「土筆野に遊びし」には一人娘としての耐え難い悲しみと温かさを感じる。

〈紅さして母なる土筆子なる土筆 差知子〉が思い出される。(典子)



火星作品 山尾玉藻選

どこへ行くにも鴨池の横通る
声出して鴨の一羽の離れけり
冬潮の満ち能舞台までの距離
闇汁の闇にしばらく待たさる
闇汁に淡き明かりの海より来
十二月鹿にたてがみありにけり
やう肥えし上六の鳩師走くる
鳩潜き空をきれいにしたりけり
鮫鱈の腹のにもも色師走かな
闇汁の闇に乳房のありにけり
退院の夫の鼻梁や白障子
松を見るくはへ煙草や年の内
年越の祓ポマード匂ひけり

宝塚 杉浦典子
大和郡山 城 孝子
八幡 大山文子

ポソ菓子屋来る数へ日の夕暮に
升売の豆粉をふく囊かな
鷹匠は伊賀の小男なりしかな
ふぐり潜りし大柚子の消えにけり
駅裏に一筋ありて歳の市
数へ日や小間物ばかり買うてをり
枕越しなる初雪の降りやまず
梟やワインの栓に手古ずりし
懐手解体中のまぐろに眼
けふ奈良の冬の雨なる匂ひかな
ペンダント重たし木の葉降る中は
山彦にとびつき凍る滝しぶき
ことごとく枯木となりて鮮しき
音だけの海を見てゐる湯ざめかな
後ろ手に障子を閉めて父逝きし
手をかけし櫂の幹に大きくさめ
尾を立てて胸より走る百合鷗

神戸 深澤 鱻

八幡 吉田 島江

明石 戸栗 末廣

選のあとに

山尾 玉藻

関西俳人協会新年会が天王寺都ホテルで催され、火星からも十名ほどの方々が参加された。積極的に他結社との交流をはかられる皆さんの顔は自信に満ちていて、火星は結社という機能を充分に働かせていると嬉しく思った。

ところで、俳壇の中には結社の存在の価値を否定し、いざれ自消するとする厳しい説がある。理由として結社の確かな主張と行動力とを兼ね備えたカリスマ的主宰が見受けられなくなったことを掲げている。なるほど一理はある。しかし主宰と会員が理想的な形で結ばれさえしていれば、そのようなことを愁うる必要はないであろう。

一般に俳句は比較的与し易い文芸と思われているが、個人でその奥深さを習得するには非常に時間が掛かり難しい。しかし結社に所属すると主宰の選を受けることが出来、また雑詠欄で相互に切磋琢磨することでより早い習得が可能となる。当然のことながら選をする立場の私の責任は重大である。

会員それぞれの従来の作品の傾向と質と比べ、またその人の将来の句の展開まで考慮し選をする。出来るだけ没にしたくないので時には添削をする。一方で会員の皆さんは何が選ばれ、何が没になったか、添削された意味は何か、色々と検討されるであろう。そうする事で自然に私が皆さんに求めているものが見えて来る筈である。俳句は作り手と読み手とを必要とする文芸であり、その前提として両者には絶対的な信頼関係がなければならぬ。私と会員の皆さんとの間でこの信頼で形成された座が成立しその機能が働いている限り、俳句が生まれる場として、俳人が育つ場としての火星の存在には大いに意義がある。そして勿論、存続の可能性を間違いない持ち続ける。現に、活躍する作家の百パーセント近くは現在もなお結社から育っていると云って過言ではない。

その上で、結社をこれまで同様に健全に存続させる最も大切な精神とは何かをいま一度確認しておきたい。それは、結社とは主宰と同じ志を持つ者の集まりではあるが、縦の軸を最も大切にする組織であるということである。即ち、結社とは選を仰ぐ主宰を頂点とする組織であり、結社イコール主宰であるという揺らぎない精神である。歴史を重ねてきた結社は必ずこの精神を貫いてきた。主宰の作品と選を否定するこ

とは結社を否定することであり、ひいては結社に拠っている自己を否定することに繋がるであろう。

独裁者のスローガンのような気恥ずかしことを今更のように述べてきた。しかし、主宰としての私はそれほどに会員の皆さん方より厳しさを求められる立場であり、それを改めて自身に論しているものと理解して頂きたい。私は会員の方々にいよいよ惚れて頂ける主宰にならねばならないのである。

どこへ行くにも 鴨池の横通る 杉浦 典子

紙幅が残り僅かなので典子さんの作品を中心に作句姿勢について少し触れておきたい。掲句は鴨の来ている季節の喜びをオースドックスに詠んで秀逸である。また、へ声出して鴨の「一羽の離れけり」は言外に鴨の陣の中の「一羽」であることが解る。その一羽が仲間を掛けるように離れていったのである。写生の突つ込みの点に於いては深いと言える。

闇汁の闇にしばらく待たさるる

闇汁の青き炎細くする 役目

闇汁に淡き明かりの海より来

同時発表及び恒屋園の「闇汁」の句である。一句目の「闇

にしばらく待たさるる」は、一見普通の発想のように思われるかも知れない。しかし闇というものに馴れていない現代人には、「しばらく」という時間が途轍も長く感じられたことだろう。実感として受けとめることで成った句である。二句目、ガス栓の近くに座った作者は炎の調整役を任されたのだ。ガス栓の調整は細めるだけでなく太くもしなければならぬ。だが闇汁の句としては細くすることで一句が成立するのである。闇の中に青い炎が美しい。三句目は闇汁の酣も過ぎ闇にも馴れてきた頃、ふと眼を移すと海の方に微かな明かりを覚えたのである。これもまた闇汁を経験した者の実感である。典子さんは常々吟行でないと句が作れないと言われる。現場主義の方である。鴨及び闇汁の句からもそれがよく解る。一般に鴨や闇汁などの兼題で作句することはよくある。しかし闇汁などの行事の経験者までが機知や観念で知的処理し、一見気の利いた句を作りがちである。自ず底の割れた句となってくる。それに比べ典子さんの作句姿勢はしんとしている。行事などは順を追って精神を鎮め実感を元に作句されている。大いに学ぶべきところである。

(以下略)

火星賞

自選二十句

平成十五年度作品より

吉田島江

九月かな養生訓を壁に貼り
ポコポコといふ音のして棉吹けり
杉玉の小雪といふけふのいろ
一さじの砂糖ふやせり今朝の冬
切干を斜に過りし鳥の影
沖の船いま櫂の芽にさしかかる
烏骨鶏の小屋吊しあり春の雪
鳥帰るズボンの裾のすり切れて

湖の真中の荒れに鶏乳む
かえるごに手足頓服持ち歩く
田水張り明けつ放しに留守しをり
葭戸入れ誰か来さうな日なりけり
汗ばみて業平寺へゆくところ
滝音に茶屋の提灯やつれぬし
案内役仰ぐ青嶺に噎せてをり
ゆつくりと山の暮れゆく土用の芽
夏痩せて空也の痩せと思ひをり
三川のゆたかに合ひしきりぎりす
うかららのまなこに白膠木紅葉かな
処暑過ぎしこころに残暑見舞ひけり

恒星巻

大東由美子

冬ざれを貫きぬたる竹刀かな
数へ日の吹きこぼれさう落し蓋
寒紅のくちびる奪ふ懐紙かな
冬林檎しよつばき水に放ちけり
天狼の牙上りくる光かな

城 孝子

高尾豊子

大佛館屏風のすそに日の射して
金魚田の霜の四角でありにけり
歳晩や城の穂すすき立ち上がる
柚子湯たく煙真すぐでありしなり
庭の木の影に木の影掃納

はてしなき空のみずいろ冬木の芽
冬晴まで伸びきつてゐるクレーン車
内定を知らされてゐる湯ざめかな
柚子晴や谷川の辺の測量士
ゐのこづちまみれの夫の戻りけり

杉浦典子

田中英子

冬の鴟句碑裏側に朝日差し
師の句碑に伸びきし桜冬芽かな
闇汁の青き炎細くする役目
酒蔵に大きな木ありクリスマス
もがり笛青竹踏みを五分ほど

骨壺に膝ふたつある青木の実
北風掃いて掃いて永平寺となりぬ
だだびろき海を見てゐる金屏風
寝て起きてもの食ふ狩の胡座かな
ぼろぼろと夜を零しぬ楯明り

獅子座

山尾玉藻推薦

山田 美恵子

小林 成子

土屋 酔月

初氷つついてきたる圭岳忌
衣掛山の先の先なる冬の虹
水鳥のちかきにありぬ記帳台
マフラーの毛先に須磨のひかりかな

加藤 君子

吉田 康子

大年の雨の起せし苔のいろ
冬帽子ベッドに置きて友の病む
もう誰も急かせてくれぬ年の暮
ひとり身もいいんじやないの日向ぼこ

丸山 照子

堀 義志郎

船上にお茶漬食みし十二月
年の瀬の暁の寺院や鶏駆くる
水蓮の大きな花に年惜しむ
アユタヤの象の背に乗り大晦日

用を来し点滴の顔馴染み
一陽来復依然りハビリ中
軟膏を塗る指として年暮るる
大坂城見下ろしぬたり年忘れ

二階よりジャズ流れくる牡蠣御飯
ほろ酔の父に八つ手の花あかり
走り出て外に人なき寒茜
大年の皿に残りし目刺の頭

待ち人の来たるわれより着ぶくれて
限りなく星を満たして賢治の忌
枯れ急ぐ河原蓬もいたどりも
くちなしの実や冬の日のありどころ

冬椿落ちてをり上むいてをり
観音のほこりきらきら十二月
師走空ぬれ手でサインしてをりぬ
日の暮やいてふ黄葉の川灯り